

コミュニケーションの場を想定したプレゼンテーション授業

(宇部工業高等専門学校) ○畑村 学

1. はじめに

今回紹介するのは、筆者が平成 21 年度に 2 年生の国語の授業で行ったプレゼンテーションの実践である。

プレゼンテーションを取り入れた授業を、筆者は 4 年前から 2 年生や 3 年生の国語で行っており、その間、より効果的にコミュニケーション力やプレゼンテーション力がつき、かつ学生が主体的・積極的に取り組めるよう改善を行ってきた。今回紹介するのは、ひとまず現時点で考え得る最も効果的な方法であり、後に記す学生への授業アンケートの結果からも、話す力・聴く力等の習得やレベルアップだけでなく、プレゼンテーション力や「図解力」といった社会で必要とされるスキルの向上にも効果があることが確認できた。

授業の工夫として、学生が今後社会に出て頻繁に参加するコミュニケーションの場（比較的少人数のグループでのディスカッション、会議報告、日常的に行われる様々なミーティングなど）を想定した少人数グループを作り、そこで自分の意見やアイデアを述べたり、他者の話を聞いて質問したりする取り組みを行っている。

以下、授業の概要を説明した後、授業の工夫を 3 つに絞って紹介することにしたい。

2. 授業の概要

本校の国語の授業は、1、2 年は現代文と古典（通年、3 単位）、3 年は現代文（通年、2 単位）、4 年は担当教員の専門性を活かして作文や小論文、プレゼンテーション（半期、1 単位）を行っている。

平成 21 年度、筆者は 1、2 年生各 3 クラス（現代文と漢文）、4 年生 2 クラス（漢詩を調べ、資料にまとめてクラス全員の前でプレゼンを行う内容）に加えて、専攻科 1 年の「日本語表現」の授業を担当した。

筆者は 1～3 年の国語では、後期に入ってから中間試験までの 7 回の授業（全体の 4 分の 1）をコミュニケーション力を習得するた

めのスピーチ・プレゼンの授業に当てている。特に 2 年生では、話し方や聴き方といったコミュニケーションの基本スキルを確認した後、3～4 回の時間数を使って学内の様々な問題をテーマ（課題）にプレゼンを行っている。プレゼン授業の流れについて図 1 に示す。

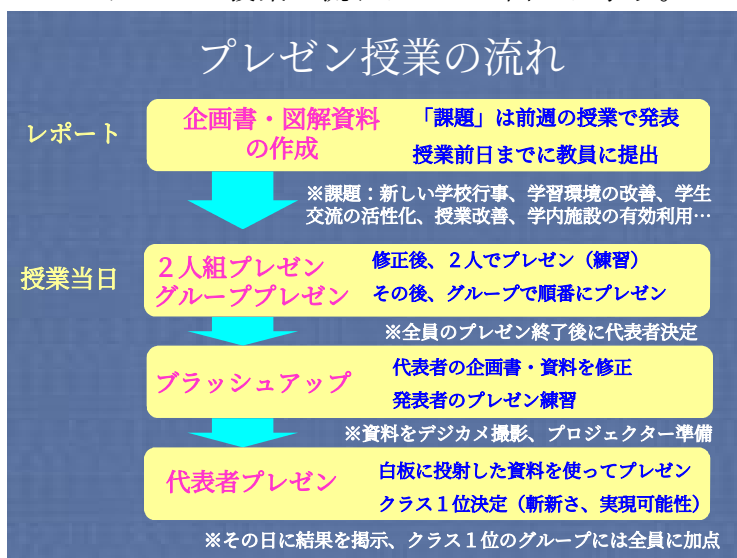


図 1 プレゼンの流れ

2.1 レポート

プレゼンを行う前週の授業の最後に企画書のフォーマットと図解資料作成用の A 4 用紙を各 1 枚ずつ配布し課題を発表する。課題は学生にとって身近な学内の諸問題を取り上げており、平成 21 年度は「学内施設の有効利用」「授業改善」「学生交流の活性化」「新しい学校行事の企画」にした。企画書と図解資料は授業の前日までに提出し、筆者がチェックしたものを授業当日に受け取る。

2.2 授業当日

a 企画書・図解資料の修正

授業当日は、前日に提出していた企画書と図解資料を返却、筆者が書いたコメントの指示に従い手直しを行う。

b 2人組プレゼン

修正後、まずは 2 人組でプレゼンを行う。この時、次の行うグループプレゼンの練習を兼ね、時間配分や資料の示し方等を確認する。

1人の持ち時間は2分で、早く終われば聴き手が質問やコメント、または企画内容や話し方についてアドバイスを行う（図解資料の説明の仕方については後述）。2人組でのプレゼンが終われば、もう一度チェックの時間を設け、その後グループプレゼンに入る。

c グループプレゼン

図2 グループプレゼンの様子



グループプレゼンは、クラスの人数やプレゼンに使える時間によって1グループ6～8人で行う。机を合わせ、プレゼンする者が全員に資料が見える位置に移動し、立ってプレゼンを行う。1人が終われば次の学生がプレゼンを行い、それを全員繰り返す。プレゼンはすべてのグループが同時に開始し、2分以内に終わった場合は、2人組と同様、聴き手が質問やコメントをする。

d 相互評価・代表者の決定

グループプレゼン終了後、配布した審査用紙に各評価項目（後述）に従ってグループで相互評価を行い、その後、グループの代表企画とクラス全員の前でプレゼンする代表者（企画が採用された学生とは別の学生）を決める。

e ブラッシュアップ

代表者が決まった後、各グループで企画内容やプレゼン方法を修正（ブラッシュアップ）する時間を5分程度設ける。修正後、グループ内で一度プレゼンを行い、順番を決め前に出て代表者がプレゼンを行う。

f 代表者プレゼン

ブラッシュアップの最中に、筆者はデジカメで各グループの図解資料を撮影して回り、それをパソコンに取り込んでプロジェクターで教室の白板に映写できるようにしておく。

代表者のプレゼンは、その白板に映写した資料を指示棒等で指し示しながら行う。

g クラスの最優秀プレゼン決定

代表者のプレゼン終了後、各グループ内で話し合い、自分たちのグループ以外で最も良かったグループのプレゼンを決め、審査用紙にグループ名を書いて提出する。評価は、斬新さ、実現可能性等である。授業時間内に行うのはここまでであるが、その後、提出された審査用紙を集計して、その日のうちに筆者が審査結果をプリントに印刷して教室に掲示し、クラスの1位を告知する。

3. 授業の工夫

3.1 企画書、図解資料の作成

授業では、レポートとして企画書と企画内容をわかりやすい図にした資料を作成する。

授業の目的はあくまでプレゼンを通じてコミュニケーション力を身につけることであるため、企画書は非常に単純なものにしている。具体的には、A4用紙1枚にタイトルとサブタイトル（タイトルは人目を引くインパクトのあるもの、サブタイトルは企画内容を要約したもの）を書いた上で、目的（企画の目的と概要）、現状（現在の問題点）、効果（企画を実施したことによる波及効果）、要望（校長や主事、担任や学生会への要望）をそれぞれ3～5項目書き、最後に署名（所属と自筆の署名）するというものである。

企画書には、必ず企画内容をわかりやすく図解した資料をつけるよう指示している。図解とは、複雑な事象や抽象的な事柄の構造を、①マルや三角、四角といった図形、②矢印などの記号、③キーワードの3つのパーツを用いて一見してわかるように要約したものである。プレゼンの際、パワーポイントの資料が文字ばかりのスライドでは、短い時間で自分の伝えたいことを十分に伝えることが難しいのに対し、発表内容をわかりやすい図にまとめた資料では、短時間で明確に伝えることが可能となる。

こうした図を書く能力、すなわち「図解力」は今後社会で大いに必要とされ、視覚的にインパクトのある図によって自分の言いたいことを提示することができれば、プレゼンの効果は飛躍的に増すであろう。

筆者は前期の後半7回の授業は図解をテー

マに授業を行っている。授業では主として漢文教材を用いてその構造を図解する作業を行い、レポートとして「私の長所と短所」「壁を越えた経験」「高専入学後の成長」「私を取り巻く人間関係」等の課題で図解させている。

前期にこうした授業を経験している学生に

とって、後期に入ってから行うプレゼン授業で図解資料を作ることは、それほど困難ではない。すでに基本的な図の書き方や図の効果について一通り学習した後の授業であるから、前期の内容を復習した後は、図の効果的

な示し方—全体的なこと（タイトル、全体のレイアウト等）をまず説明し、その後に細部の説明に入ること、人の眼の動きや矢印の流れに沿って説明すること、聴き手の視線を引きつけるために説明箇所を指し示しながら行うこと等—に絞って学習すればよいのである。

2人組であれグループであれクラス全員の前であれ、準備した企画書は自分の手元にあるだけで聴き手に提示はしない。聴き手に示すのは図解資料だけである。よって、企画内容の全体、あるいはポイントとなる箇所を、わかりやすくかつインパクトのある図によって提示できるかどうかは、良いプレゼンになるかどうかのカギを握っていると言える。

3.2 実際のコミュニケーションの場を想定した少人数グループによるプレゼン

社会人に求められる能力として、コミュニケーション能力が大切であることは今さら言うまでもないことであるが、では、学生が今後参加するコミュニケーションの場にはどのような状況があるのであろうか。もし授業でコミュニケーション力を習得させるのであれば、できる限り実際の場面を想定したものにするのが望ましいであろう。

図3は、様々なコミュニケーションの場を座標軸で示したものである。縦軸は人数（多い少ない）、横軸はオフィシャルな場面であるかそうでないか（公・私）を基準にして便宜的に分類してみた。丸で囲った範囲の場が、頻繁に行われるコミュニケーションの場であると考えられる。

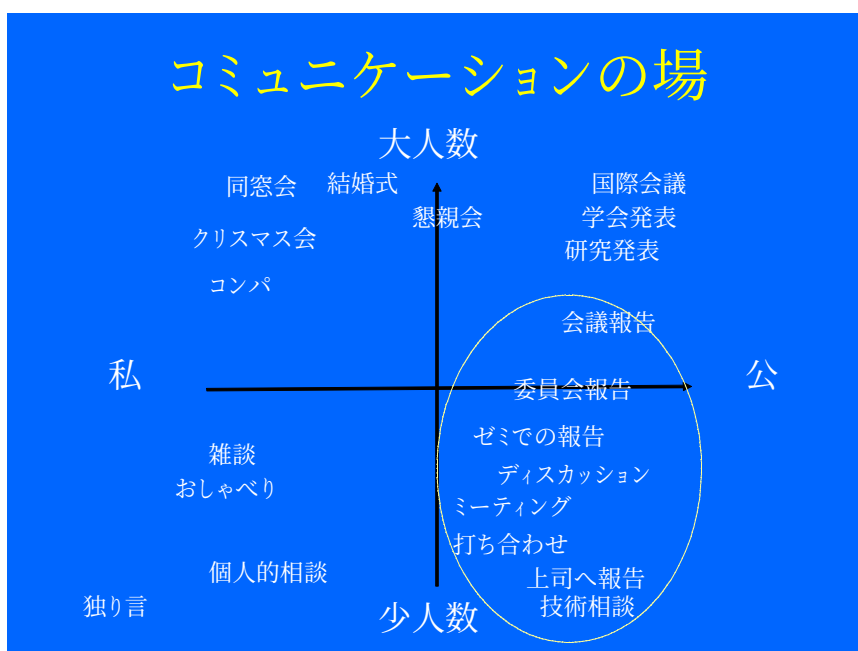


図3 コミュニケーションの場

このように見てみると、卒業後の学生（大学に進学した学生も含めて）が日常的に行うコミュニケーションの場は、人数的には少人数のグループであり、緊張しながら行う公的な場面と言うよりは、日頃からよく知る関係のなかでの、比較的リラックスした、いわば「半公半私」の状態でのコミュニケーションではないかと考えられる。

こうした実際のコミュニケーションの状況を考えて、授業では6～8人のグループを作り、毎時間必ずグループ内でプレゼンをするようにした。メンバーは固定せずに、毎時間席替えをして行った。

クラス全員でのプレゼンは、グループの代表者として選ばれた学生だけが前に出て行うことにする。その場合、同じ学生が毎時間プレゼンしないように、一度代表者になった学生は、次回以降代表者の選考から除外される。よって、課題を変えて全部で4回程度行うプレゼンでは、1クラスの半数以上の学生が、一度は全員の前でプレゼンすることになる。

3.3 審査用紙を用いた学生同士の相互評価

学生同士の相互評価はグループプレゼンと代表者プレゼンの両方で行っており、成績（レポート点）もその評価をもとに出している。

グループプレゼン終了後、グループ内で評価項目ごとに1、2位を決める。評価項目の基本となるのは以下の項目である。

- A 企画の斬新さ
- B 企画の実現可能性
- C 話し方・声・態度
- D 視線
- E 資料の完成度・インパクト
- F 資料の使い方
- G 総合評価
- H 良い聴き手
- I ブラッシュアップ

各項目の1位は2ポイント、2位は1ポイントで、トータルのポイント数でグループの順位を決める。1回のプレゼンの点数を6～10点にし、トップの学生が10点満点となるようにしている。

学生による相互評価のメリットは、評価項目を理解することで自分がプレゼンを行う際に各項目を意識してプレゼンできるようになること、また聴き手として他者のプレゼンを聴くことで、他者のやり方を自分のプレゼンに活かすことができることが挙げられる。

4. 授業の効果

以下に平成21年度の2年生2クラスで行ったスピーチ・プレゼン授業に関するアンケート結果を挙げる。評価段階は、1 非常に当てはまる、2 まあ当てはまる、3 どちらとも言えない、4 あまり当てはまらない、5 全く当てはまらない、の5段階である。紙面の都合上、結果のみ報告する。

アンケート調査の結果、「授業前と比較して、人前で話すより良い話し方はできるようになりましたか」という質問に対しては、全体の57パーセントの学生が授業前と比べて「非常に当てはまる」「まあ当てはまる」と自覚していること、「授業前と比較して人の話のより良い聴き方はできるようになりましたか」という質問に関しても、同じく57パーセントの学生ができるようになったと自覚していることが確認できた。

次に「企画書を使ってより良いプレゼンができるようになりましたか」という質問に対しては、「非常に当てはまる」が全体の9パーセント、「まあ当てはまる」が全体の46パーセントで、全体の55パーセントの学生が企画書を用いたプレゼンテーション力のレベルアップを自覚していることがわかった。

最後に「資料（図解）を使ってより良いプレゼンができるようになりましたか」という項目に対しては、全体の56パーセントの学生が「当てはまる」「まあ当てはまる」と実感していることが確認できた。

5. おわりに

以上、本報告では、実際のコミュニケーションの場で使えるコミュニケーション力を身につけるためのプレゼンテーションの授業について紹介してきた。報告の中では、学生が効果的にコミュニケーション力を習得し、授業に主体的積極的に取り組むための3つの工夫として、①企画書、図解資料を用いてプレゼンを行うこと、②少人数グループによるプレゼンを行ったこと、③学生同士の相互評価を取り入れたことを紹介した。

参考文献

コミュニケーション力を習得するための授業での取り組みは、以下の一連の報告も参照されたい。特に3) 4)の一部は、本報告で紹介した内容とも関連する。

- 1) 漢詩を素材としたプレゼンテーション授業の実践、『漢文教育』29, pp.1-34 (2004)
- 2) 「聴く力」をつけるプレゼンテーション授業、論文集『高専教育』29, pp.385-390 (2006)
- 3) 「図解力」を鍛えるープレゼンテーションスキルを磨く国語の授業ー、論文集『高専教育』30, pp.463-468 (2007)
- 4) 「話す力」を鍛えるプレゼンテーション授業、論文集『高専教育』31, pp.463-468 (2008)
- 5) 高専生と読む漢詩ープレゼンテーションを取り入れた高学年国語の授業実践ー、論文集『高専教育』32, pp.177-182 (2009)
- 6) マインドマップを利用した小論文授業の実践、論文集『高専教育』33, pp.157-162 (2010)

附記

本報告は、平成21年度豊橋技術科学大学高専連携教育プロジェクトのプロジェクト課題「技術者教育における日本語コミュニケーション能力向上メソッドの開発とデータベース化」の研究成果の一部である。